

学生海外調査研究	
W.W. コベット (1847-1937) および「ファンタジー」に関する資料調査	
西阪 多恵子	比較社会文化学専攻
期間	2012年9月9日～2012年9月24日
場所	ロンドン (イギリス)
施設	英国図書館、ギルドホール図書館、王立音楽大学図書館、遺言登録本局

内容報告

1. 海外調査研究の目的と必要性

1.1 概要 W.W. コベット (1847-1937) および「ファンタジー」に関する資料調査

実業家でアマチュア音楽家のW.W.コベット (Cobbett, Walter Willson 1847-1937) は、20世紀初頭、イギリス室内楽の創作と演奏を、コンクールの実施や作品委嘱等によって推進した。コベットが提唱した「ファンタジー」は、17世紀のイギリス音楽のファンシーにヒントを得た単一楽章の室内楽の曲種であり、イギリス音楽界に多大な影響を与えたとされる。しかし、コベットの活動および「ファンタジー」に関する実質的な研究はほとんどなされておらず、関連資料の所在も不明確である。今回の調査目的は、関連資料の所在の調査・確認、その閲覧による情報収集および作品研究の資料の閲覧である。未出版資料のみならず、関連出版物の多くが電子化されておらず、著作権上の制約により、日本国内での閲覧は困難なため、現地調査が必要であった。関連資料を所蔵するロンドン市内の図書館等において調査を行うこととした。

1.2 各調査対象館・局とその主な調査資料

以下の各項目名は各館・局における主な調査資料である。それぞれの調査目的もしくは本調査研究との関係を記す。

1.2.1 英国図書館 (British Library) —Music Student と Chamber Music A Supplement to the Music Student

コベットは月刊誌 *Music Student* (1908-1921刊行、以下同) の付録として、隔月刊の *Chamber Music* を私費で編集発行した (1913-1916)。同誌はコベットと同時代の音楽観等を伝える基本資料とされ、後にコベットが編集発行する室内楽事典 *Cyclopedic Survey of Chamber Music* (1929-1930) には同誌からの補筆転載とみられる項目が多い。また、*Music Student* 自体にもコベットは執筆している。両誌ともに本研究に関連する内容を含むと思われる、全体の通読を計画した。

1.2.2 ギルドホール図書館 (Guildhall Library) —音楽家組合の議事録

ギルドホール図書館は、ロンドンとくにシティの歴史を専門とする公共調査図書館である。その主要アーカイヴの一つが同業者組合文書 (The City of London Livery Company Archives) である。音楽家組合 (Worshipful Company of Musicians 以下WCM) は16世紀のギルドから発展した音楽振興団体であり、その資料もこれに含まれる。議事録のほか、書簡、同組合パンフレット類、新聞記事スクラップなどがある。

コベットは WCM のメンバーであり、「ファンタジー」コンクールの最初の2回を同組合の主催で行った。また、後に同組合の理事長 (Master) を務めた。

1.2.3 王立音楽大学図書館 (Royal College of Music Library) —R.C.M.評議会議事録、R.C.M. magazine、学生登録簿、女性音楽家協会アーカイヴ

コベットは、王立音楽大学 (Royal College of Music 以下RCM) に対し、学生を対象とする室内楽の作曲および演奏の賞のために資金を提供した。議事録および RCMの刊行物 *R.C.M. magazine* はその関連記事を探すために、また、学生登録簿は「ファンタジー」作品の受賞者に女性名が多い¹ことから、当時の作曲専攻学生数の性別比を把握するために、閲覧することとした。

女性音楽家協会 (Society of Women Musicians 以下SWM) は1911年に創設されたイギリスの団体である。会員にはプロもアマチュアもあり、男性は準会員として入会を認められた。コベットはその創設後間もない時期からの準会員であり、講演や室内楽コンクール、SWMの室内楽部門への寄付やイギリス室内楽楽譜の寄贈などを行った。1972年のSWM解散後、その資料は RCMに移管された。書簡や新

聞記事スクラップなどにコベット関連の資料がある。

1.2.4 遺言登録本局（Principal Probate Registry）—コベットの遺言書

コベットの個人的な背景について詳細は明らかではない。遺言書の閲読は、コベットの私的な面やその遺産の用途について手がかりを得るためである。

2. 各館・局における調査結果

各館において、予めウェブサイト上の目録や問い合わせにより所在を把握していた資料について概ね確認した。記録文書の残存など一次資料に関する新たな手がかりはなかったが、閲読（一部転記または複写）した内容から今後の研究計画にとって有用な情報や示唆がいくらか得られた。以下、調査結果の概要を記す。

2.1 英国図書館

月刊誌*Music Student*については、同館は第1巻および第2巻を所蔵せず、そのほか若干の欠号があることがわかった。また時間不足のために、全体の通読にはいたらなかった。

同誌の誌名に *Student* とあるが、その読者対象は副題に「音楽を学び、教え、聴くすべての人のために」とあるように学生に限らない。発行者名 *Home Music Study Union* から示唆されるように、啓蒙的な性格を持つといえる。コベットの編集による隔月刊誌 *Chamber Music A Supplement to the Music Student* は、その付録として挟み込まれていたらしい。同館では全22号（冊）が合冊製本され、*Music Student* とは別物として扱われているが、両誌の関係は密接に思われる。例えば、1913年6月の *Chamber Music* の創刊は *Music Student* 誌で大々的に予告され、その後も *Music Student* の目次に *Chamber Music* の内容がしばしば混在する。また、1916年11月に *Chamber Music* が終刊を迎えるまで *Music Student* にコベットの執筆記事はほとんどみられないが、その後、連載“*Chamber Music Notes*”を執筆しており、これは *Chamber Music* でコベットが執筆連載した“*Obiter Dicta*（傍論）”に続くものともいえる。これらにはコンクールや「ファンタジー」への言及も多い。両誌の関係には、本体と付録という以上の相互補完的な面もあったように思われる。

2.2 ギルドホール図書館

音楽家組合（WCM）の議事録は、1772年から1949年まで全12巻あり、その内の第8巻（1898-1907）、第9巻（1907-1914）、第10巻（1914-1925）、第11巻（1925-1937）を閲読した。議事録には、報告および審議決定事項が整った形式で明瞭な筆跡によって記録されている。これらはコンクール等に関する経緯を示し、コベットのWCMにおける積極的な働きをうかがわせるものであった。

これには二つの面がある。一つは、室内楽および「ファンタジー」の推進のために、コベットが立案したWCMの名によるコンクール等の企画であり、もう一つは、コベットのWCMにおける役職である。

WCM主催による2回の「ファンタジー」コンクールの他に、コベットは「ファンタジー」作品の複数の作曲家への委嘱と室内楽の貢献に対するメダル賞の設立をWCMの名で行うことを提案し、それぞれ実施されている。いずれの場合もコベットが企画案と財源の提供を申し出てWCMの名による実施を求め、WCM委員会は申し出に敬意を表してこれを受諾している。コンクールの際には、具体案作成のための委員会が設けられた。WCMは「古くからあるがあまり裕福ではないシティ・ギルド」（Cobbett 1929: 284）であり、財政面では慎重であったようである。コンクールの賞金は2回とも、第1位はコベットが、その他の賞はWCMの会員個人が提供した。初回のコンクールは成功し、入賞作の演奏会や楽譜出版によってWCMは収入を得るが、2回目のコンクールはWCMが出費しないことを条件に実施され、入賞作の出版費用はある会員の寄付でまかなわれた。コベットはその後1920年まで合計7回の「ファンタジー」を主な課題とするコンクールを実施したが、3回目以降はWCMによらず単独で行っている。

コベットのWCMにおける役職は、議事録によれば、1926年に副長官（Junior Warden）、翌年長官（Senior Warden）、さらに翌1928年理事長（Master）といずれも1年任期を全うしている。驚くべきことに、コベットはその後、89歳で没する3ヶ月前の1936年10月まで年4回の委員会に欠かさず出席し、最後の回においても、コベット・メダルの対象者について具体的な提案をしている。これをWCMの活動に対するコベットの熱意の表れとみるならば、コベットとWCMとの関係という点で示唆深く、コンクール等の企画もこの点から検討の余地があると思われる。コベットが室内楽とファンタジー推進のためにWCMに働きかけた背景や、コベットの活動におけるWCMの重要性を考えさせる記録である。

瑣憶¹にはまた、コンクールの詳細についてこれまでみた資料と合致しない記述もみられた²。

議事録のほか、WCMの資料にはパンフレット類もあることから、報告者は現地調査前に第1回コンクール募集要項の存在を期待していた。この募集要項でコベットが提唱した意味での「ファンタジ

一」という言葉が初めて登場したとされるからである。その結果、募集要項そのものの残存は確認できなかったが、WCM 関連の新聞記事スクラップに、これを掲載した音楽新聞記事が見出された。「ファンタジー」コンクールについての今後の考察に重要な資料となると思われる。

2.3 王立音楽大学図書館

2.3.1 王立音楽大学 (RCM) とコベット

コベットは学生対象の賞のための資金を1920年以降、毎年提供し、1928年には1000ポンドの寄付により、恒久的に続く賞としている。その経緯などを知るため、1920年代の評議会 (Council) および執行財務委員会 (Executive and Finance Committees) それぞれの議事録を閲覧した。議事録では、概ね執行財務委員会の承認事項がその3週間後に評議会で報告されるという形で、コベットの申し出とその受諾、受賞者等が簡潔に記録されている。また、*R.C.M. magazine* (年3回刊) については、主に受賞記録をみるため、1920年代および1930年代刊行分を閲覧した。受賞記録については *R.C.M. magazine* も議事録とほぼ同様であり、いずれも詳細度は年次により異なり、すべての回について記録がなされているかどうかは明確ではない。一方、受賞作品の「ファンタジー」の演奏によるコベット賞受賞といった興味深い記録も散見された。

学生登録簿 (*Student Register*) については1920年代分を閲覧し、主科 (principal subject) または副科 (second subject) を作曲とする学生名により性別を推定し、学生数の性別比をみた。その結果、主科は男性名と女性名の比率が5対1、副科は同じく2対1で男性名が多かった。受賞作がすべて「ファンタジー」である1923年から1934年までについて、受賞者名が明らかなのは、男性名3人に対し女性名は8人とかなり多く、「弦楽四重奏曲」など一般的な曲名が多いその後の受賞者名は、男性名22人に対し女性名はわずか4人であるのは興味深い (Maw 2010: 119-120)³

なお、コベットはRCMの他、王立音楽院 (Royal Academy of Music) に対しても、学生の賞のために寄付している。また、トリニティ音楽大学のフェローでもあり、ギルドホール音楽大学に室内楽楽譜を寄贈するなど諸音楽学校との関わりがあるが、とくに、RCMとの関係が顕著にみられる。

2.3.2 女性音楽家協会 (SWM) とコベット

女性音楽家協会 (SWM) アーカイヴの資料には、フォルダーに収納されたパンフレット、プログラム、書簡等700点余と、新聞記事スクラップ帳等がある。コベット関連資料を中心に閲覧した。頻出する事項は、コベットの寄贈によるイギリス室内楽楽譜のライブラリー (Cobbett Free Library of British Chamber Music) とコベット・チャレンジ・メダル (弦楽四重奏演奏コンクール) それぞれに関するものである。パンフレットや新聞記事等の数多いことから、盛んな活動状況がうかがえる。

↑記のライブラリーはイギリスの現代作品を主とする百数十点の楽譜からなり、20曲ほどの「ファンタジー」を含む。コベットはこれらの楽譜が会員以外の人々にも利用されることを望み、1918年の開設以来、SWMは貸出方法を定めて組織内外にライブラリーについて広報した。*Times* 誌によれば、「昔のイギリス音楽は多くの図書館に楽譜があるが、現代音楽の楽譜貸出図書館はこれが初めてと思われる」(1918.2.26)。なお、このライブラリーは1972年のSWM解散後、オーストラリアのアデライド大学に譲渡された。数十年間の状況の変化を感じさせる双方の書簡もアーカイヴに保管されている。

コベット・チャレンジ・メダルは1927年、室内楽演奏の向上をめざして創設されたコンクールである。当初から一般利用を目的としていたライブラリーと異なり、初めは会員対象としていたが、後に一般のアマチュアに開かれた。コベットは「SWMの第一の恩人 (first benefactor)」⁴であると同時に、SWMを通じて一般の室内楽への関心を高めようとしていたと思われる。

アメリカの室内楽のパトロンであるエリザベス・クーリッジ⁵の訪英の際、コベットはクーリッジにSWMの晩餐会への招きに応ずるようはたらきかけた。パトロンとして自らと立場を同じくするクーリッジを、音楽界の女性として彼女と立場を同じくするSWMに引き合わせようとしたようすが書簡などからうかがわれる。SWMについてコベットは「良い音楽のためにこれほどの実績を挙げてきた女性団体は世界のどこにもないだろう…注目すべきロンドンの驚異の一つである。イギリスのあらゆる女性音楽家の支持に価する」(Cobbett 1930: 435)と称賛した。SWMへのこうした言及によって、コベットはその宣伝に与したともいえよう。

一方、SWMの男性の準会員や音楽家に対する態度についても示唆深い資料が見られた。SWMの拠点は女性団体の施設であり、男性の利用は禁止されたが、準会員の男性作曲家たちにも作品発表の機会を与えるなどしている。

コベット関連の資料としては、ほかにコベット記念賞 (1948年に設立された隔年の室内楽作曲賞) 関連のパンフレットなどがある。本調査での閲覧はアーカイヴの目録からコベットが検索される資料にほぼ限り、また時間の都合上、そのすべての閲覧は果たせなかった。SWMアーカイヴの多くの資料には、そのほかにもコベットと関連する記録や情報があると考えられよう。

2.4 遺言登録本局

コベットの遺言書は死の 2 年前、1935 年に作成され、その内容は遺産の扱いについて書かれている。妻は 1932 年に亡くなっており、文面上、遺産分与の対象に親族らしい名前はない。遺産分与の筆頭にロンドン市内に住むある夫人の名が挙げられているが、その関係は記されていない。次に実業家としての共同創設会社のパートナー、ついでハウスキーパーの女性、WCM、および SWM などが挙げられている。遺産額や分与の仕方は、今後の研究過程で参考データとなりうるであろう。

3. まとめと今後の課題

本調査研究は、本学における報告者の研究テーマ「コベットとその“ファンタジー”」に関する資料調査であるが、「コベット」と「ファンタジー」の二つの事項の前者に重点をおく結果となった。コベットの伝記的な詳細は不明な点が多いが、その活動に関し、一次資料を含む当時の文献によって新たな情報がある程度得られた。その中でギルドホール図書館と RCM 図書館での調査結果を元にそれぞれ次の 2 つの事柄について、博士論文の各 1 章として発展させたいと考えている。一つは初回のコンクールを中心とするコベットの活動と WCM との関係であり、もう一つはコベットと SWM および女性音楽家との関係である。

後者については、あるいは、『ジェンダー史学』への投稿も考えている。上述の事柄にコベットと SWM 会員個人との繋がりを視野に入れることによって、当時の音楽界の女性とコベットの関係についてより多面的な把握が可能であろう。例えば、*Chamber Music* には、SWM 創設メンバーであるマリオン・スコットとキャサリン・エッガーの共同執筆による連載記事がある。室内楽に関する女性の活動成果について、連載第 1 回は室内楽クラブ、続いて、演奏会の企画主催、演奏、作曲、といった順に回を重ねていく⁶。コベットは女性たちに発信の場を提供することによって、*Chamber Music* の編集者として自らに利すと共に、男性作品中心の音楽界の視野の拡大や女性の可視化に与したといえるかもしれない。

これらコベットの活動に「ファンタジー」がどのように位置づけられるかは今後の課題である。本調査研究においては、「ファンタジー」の諸作品について英国図書館とギルドホール図書館で若干の出版譜、手稿譜を閲覧し、タイトルなどを確認した。多くの作品が著作権期間内にあるため、今後の研究計画によっては、複写許可のための手続きを試みたい。また、RCM における調査では「ファンタジー」とジェンダーの関係に示唆が与えられた。本研究テーマに関して、報告者はこれまでに「ファンタジー」とソナタ形式との関係について検討したが、ソナタ形式はとくに 20 世紀末にジェンダーの観点から論じられた音楽形式でもある。一方、コベットのアマチュアという立場は音楽に関わる女性にとって概して男性以上に密接な立場であり、コベットと SWM との関係は、本研究にジェンダーが有効な視点となりうることを示唆するといえよう。こうした観点をも視野にいれ、本調査研究の結果を踏まえた各論をまとめつつ、今後の研究を進めていきたい。

本調査研究は、国際的な女性リーダーの育成を目的とするプログラムに与るものである。海外研究ならではの歩を進める機会が与えられたことに深く感謝する。

注

1. “Cobbett composition prizes at the RCM, 1923-50” (Maw 2010:119-120)
2. 第 1 回コンクール入賞者について、他の文献では 4 位あるいは 6 位とされている Haydn Wood の名が議事録では第 2 位にある。
3. 注 1. 参照。受賞者の一覧であり、性別への言及はない。
4. The Christian Science Monitor special music correspondent, “The Society of Women Musicians,” *The Christian Science Monitor*, 1920.8.14. 執筆者の correspondent は SWM 創立の中心メンバーであったマリオン・スコット。注 6 参照。
5. Coolidge, Elizabeth Sprague (1864-1953) アマチュアのピアニストで作曲家でもある。Frank Bridge や Eugene Goossens などイギリスの作曲家をも支援した。1926 年、室内楽功労賞のコベット・メダル (本稿 2-1) を受賞。1932 年、クーリッジ自身も同様の賞を設立した。第 1 回の受賞者はコベットであった。
6. *Chamber Music* の創刊号から第 11 号まで、1913 年から翌年にかけて 9 回に渡り、連載された。Scott, Marion (1877-1953) は音楽学者、作曲家、ヴァイオリニスト。Eggar, Katherine (1874-1961) はピアニスト、作曲家。

参考文献

- Cobbett, W.W. (1913-1916) (ed.) *Chamber Music: A Supplement to The Music Student*.
 — (1929-1930) *Cobbett's Cyclopedic Survey of Chamber Music*, 2 vols, London: Oxford University Press

(Reprint: London: Travis & Emery Music Bookshop, 2009)

Maw, D. (2010) 'Phantasy mania': Quest for a National Style. In *Essays on the History of English Music in Honour of John Caldwell: Sources, Style, Performance, Historiography*, ed. E. Hornby and D. Maw, Woodbridge: The Boydell Press, 97-121.

Music Student, the Home Study and of the Music Teachers' Association, vols. 3-14 (1910-1921).

The R.C.M. Magazine, Royal College of Music Union. vols. 17-33 (1920-1937).

Royal College of Music. Minute Books. Council, vol. 5; Executive and Finance Committees, vols. 13-14.

—— Student Register 1921-1930.

Society of Women Musicians Archive. Royal College of Music.

Worshipful Company of Musicians. Guildhall. Court minute books, vols. 8-11 (1898-1937).

—— ——— Scrapbook of press cuttings, [vol. 1], (1893-1915).

にしざか たえこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

本調査研究の報告者である西阪多恵子さんは、すでに学界において、女性と音楽に関する研究者として一定の評価を得ている研究者であるが、今回のプログラムによる調査研究では、19世紀末から20世紀前半期のイギリスにおいて活躍した、W.W.コベットというアマチュア音楽家と、ファンタジーという音楽のジャンルとの2つの事項について一次資料の文献資料等を、英国図書館、ギルドホール図書館、RCM 図書館などで調査を行なった。その結果、室内楽の領域で女性たちが様々な音楽に関わる活動を発信し、とりわけ組織としての女性音楽家協会 SWM と個人としての様々な女性音楽家たちとコベットとが、アマチュア音楽家という軸を通じて、イギリスの音楽界において重要な位置にあったことを推察する糸口を見いだした。このことは今後の音楽史研究において、アマチュアと女性という分野を積極的に開拓するための、新しい知見を得る成果として高く評価できる。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・永原 恵三)